

たじみん昼話 138

企業も学問も、総合格闘技の時代にいる

先日、某外国企業で勤務する友人が帰国した。緊急事態宣言が解除された後、隔離期間を経てから顔を合わせた。お互い畑違いの職場で勤務してきたが、学生時代の研究で苦楽を共にした成果か？話のマッチングに時間はかからなかった。

彼は、科学技術とビジネスの融合により、企業と大学・研究所を繋ぐ仕事をしている。ビジネス相手は米国の GAF A から町の工場までと多岐に渡る。話が盛り上がったのは日本の人材育成の事で、特に日本の高度な科学技術やノウハウの海外流出に対する共通した危機意識についてだ。

彼が危惧していたのは研究者と経営者の姿勢だ。日本の研究者は全分野の能力が高い。しかし説明能力や他分野への転用や应用能力等の創造性が不十分なことから、研究成果が普遍化かつ汎用化されていないことに課題があるという。

一方経営者は、製品化から逆算して科学技術を捉える創造力とその理解能力の素早さに欠けていることに課題があるという。彼が言うには、米国の経営者は常時ビジネスチャンス伺っており、必要な創造力やその基盤となる理系の素養を培うことに余念がないのだそうだ。これが日常の俯瞰的観察力を培っており、この準備があるからこそ、米国経営者は新しい科学技術の開発に迅速に対応できるのだという。だから機会が提供されれば、彼らは日常の中からその技術の応用を、最低でも5つは想起し試すのに時間はかからないのだそうだ。そしてこの能力の差が、日本が様々な分野で高度な技術や研究知見を持っていながら、諸外国に後塵を拝してきた最大の理由であるという。

しかし、これからの時代は日本にとってチャンスの時代だそうだ。それは世界の産業界の覇権を握る条件が、大量かつ廉価の時代から、保持する技術の多さで勝負する総合格闘技的な時代になるからだという。日本は高度で多種多様な科学技術を保持しており、この発展の要件を満たす数少ない国だからだそうだ。

新興国が、ソフトウェアやインターネットで国力を伸ばして、日本産業に脅威を与えているという見方があるが、これは科学技術の総合化という点で、太刀打ちできないことの裏返しであり、恐れることはないのだそうだ。

日本がやるべきことは、他国に例がないほど裾野が広い産業基盤を強化することであり、そのためには2つの観点で繋がる力を持つ研究者と経営者を育成する必要がある。

第1は、文理の相互理解を促進し融合を図るため、理系の工学部や理学部希望者は文系科目を、文系の経済・経営・文学希望者は理系科目を徹底的に学習し、双方が自分の専門をベースにした総合的な能力を持つように心がけること。

第2が、適切な判断力を持つコーディネーターの育成を図ることだ。

彼は、これから日本の技術力を生かして、ガバナンスやファイナンスなどの企業の経営力を融合して、コロナ禍で傷ついた日本の国力を高めることを実行するという。

そういえば、生物の進化を解説した「種の起源」のダーウィンも、その発想のヒントはマルサスの著書「人口論」という経済論だったことを思い出した。

私は理系ですから、いやいや文系ですからと言っている時代ではないということだ。